分かる（わかる）とはどういうことか(20251213)

わかる、分かる、解る、判る、理解する

知識体験から自分でわかろうとしてわかる

分かったと思ってもわかっていなかった

他者の気持ちを理解する

世界の成り立ちをわかる

外にではなく自分の内にある

自分のことを考える→知る

最も難しい

自分→無から生まれるのでなく他者の影響のもと生まれる

自分と世界とのつながり

自分自身に中心がある→軸がある

体験・経験を比較することによりできていく

変化して行く

自我がわかる→わかりたい→自我発動

自我→～したいという欲求

周りがやるからまねるということもある

居場所、生存本能

傾向性（なんとなく好き、嫌い）

自我の欲求、形成→安心する

死ななければならないのに何故生きるか→わからない

わからない（何だ？どうして？…）→不安→わかりたい

生きる→意味がわかる、納得する、腑に落ちる

知覚（眼耳鼻舌身意）→五感＋第六感→対象を区別する、注意する（おや？）

考える（思考）→わかる（感情）

わかったつもり→安心より先のわかりたい

こころの働き（人間の心の中で起こること）

客観的な事実ではなく心に思い浮かべる像→心像

眼を開けているからモノが見えるのではない→訓練によって見ることを学習する

外の世界（客観世界）を心像という形に再構成して見ている（脳）

客観的事実を扱うには科学的実証という別の心の働きが必要

神経ネットワークの形成

知覚心像が意味を持つのは記憶心像があるから

過去の記憶の「型紙」に照らしてはじめて意味を持つ

言葉→モノ、コトに名前を付ける→心像が安定する

言語→人間が取り決めた約束事

「わかる」→言葉の記憶から始まる（名前という音ではなく「意味の記憶」）

相手の言葉を受け取っても心には何も喚起されない

死の恐怖→肉体の死ではなく心がなくなること

メカニズムが知りたい

記憶という土台が出来上がって「わかる」「わからない」という心理的反応が生ずる

記憶がなければわからない

意識がなくなる→認知症で自分のことを忘れていく恐怖

理解した→誤解した

わからないことがわかった

なぜわかりたいと思うか

わかるにもいろいろな意味がある

納得できる、腑に落ちる（身体的）

エントロピー増大の原理（熱力学第二法則）

我々は「わからない」と不安になる

わかろうとし続けることが大事→生きること

宇宙のあらゆるものは秩序ある状態から無秩序な状態へと自然に変化する（熱平衡に向かう）

秩序ある分類された世界、整理整頓された世界を志向する

生命の本質はエントロピー減少にある（E.シュレッジンガー）

必要なものを選んで秩序を作る→生命

情報→混沌の中から秩序をつくり出せる

必要なものだけを取り込んで熱を作り、周囲のエントロピー増大傾向と闘っている

死んだら身体は塵芥となる→無秩序